

# 虹

# い も じ 鋳物師の心 父から子へ

## ⑤ 高岡銅器 老舗問屋の物語

背筋が自然と伸びるのは、久しぶりに結んだネクタイのせいばかりではなかった。

大寺康太さん(35)は、高岡市金屋町の銅器問屋「大寺幸八郎商店」の6代目。ふだんはジーンズで鋳物工場を回る。

今年4月、県民会館で行われた「第14回とやま発明賞」の表彰式に臨んだ。発明賞は、特許や実用新案などを取得した中小企業を対象に選ばれる。

高岡銅器の老舗問屋と、発明賞。一見交わりそうにない二つの交点に、康太さんの父、康雄さんがいる。

康雄さんは5年前、がんで亡くなった。59歳だった。病を得てなお鋳物の研究を続けた「鋳物師」だった。

「父さんは喜んでくれているかな」  
県発明協会長賞の賞状を手に、いつも柔らかな康太さんの表情が引き締まった。

父がたどり着いた独自の鋳造方法の特許化は、生前、かなわなかった。



「仕事でもゴルフでも、康雄ちゃんは何でも一生懸命だったな」。高岡問屋センターにある事務室で、笠原昇雲堂の笠原他喜雄さん(73)が振り返った。

隣の建物を指差して、「老舗の問屋なのに、ここで鋳物の製造を始めた。これには驚いた。まず考えられないことだよ」。

1974年、康雄さんは京都大を卒業した。父は既に亡く、1860(万延元)年に創業した大寺幸八郎商店の待望の5代目だった。

時代は高度成長から安定成長へ移り変わるころ。いまは販売額が右肩下がり的高岡銅器も勢いがあつた。

問屋に専念していたのは10年ほどだった。やがて倉庫に炉を据え鋳物工場を作った。大学で冶金を学んだ金属の専門家でもあつた康雄さんは、常に「よりよい鋳物」を求めていた。

この工場では橋の銘板から銅像、モニュメントまでどんな注文にも応じた。妻の雅子さん(65)が原型づくりや着色を手伝った。分業制の高岡銅器の中で、すべての工程を手掛ける「工房」のようだった。

3人の子どもたちも、大学の長期休暇には鋳物づくりを手伝うため帰省した。3人きょうだいのうち、「家業が気になって東京に戻りきれなくなった」(雅子さん)、次男の康太さんが跡を継ぐことになる。

高岡銅器は90年に販売額のピークを迎

え、以後減少の一途をたどる。和から洋、家から個へ。生活様式の変化が始まっていた。大寺幸八郎商店も問屋業を細々と営みながら、製造を続けた。康雄さんはいい鋳物を作りたい一心で、材料の面からさまざまな実験を繰り返していた。

「大変な発見をしたぞ」。ある日、康雄さんが興奮気味に康太さんに話し始めた。内容はよく分からなくとも、康太さんは「研究熱心な父のことだ。きっとすごいことなんだ」と直感した。

2001年、康雄さんは鋳造方法についての特許を出願した。

く切り取らなくてはならなかった。

その年の暮れ、工場を閉じた。金属を溶かす炎に、文字通り家族で汗を流した工場だった。大寺幸八郎商店は創業の地、江戸の風情を残す金屋町に戻った。

康太さんが問屋を続け、雅子さんは千本格子のある自宅を開放し、小売りのギャラリーを始めた。康雄さんを看病しながら続けられる唯一の道だった。

出願した特許は、効果は分かるが因果関係が不明であるとして退けられた。康雄さんはあきらめなかった。

既に工場はない。知り合いの工場で炉を

「お父さんは自身の生きた証しと、そして、特許という財産を子どもたちに残したんですね」。父子の特許取得をサポートした廣澤勲(ひろさわいさお)弁護士が話す。



有形無形に父が残してくれたもの。康太さんは日々、工場を回っていてその大きさを感じている。

「浪花節みたいな話なんですけどね」と、中村製作所—高岡市長慶寺—の中村進さん(71)が少し照れたように話す。

康雄さんの死の前年だった。康雄さんから雅楽の管楽器、笙のリードを作ってほしいと頼まれた。一緒に仕事をするのは初めてだった。

精密鋳造を手掛ける中村さんの腕を見込んでのことだった。笙奏者の注文に、康雄さんの体はもう応えられなかった。

笙は17本の竹と15枚のリードからなる。リードはわずか数枚の金属板だ。康雄さんから渡された紙には、材料の配合から溶解の方法まで事細かに記してあった。

「こんな緻密な鋳造をするのか」。中村さんは驚いた。「このたった一度きりの仕事で、金属に向き合う姿勢に教えられた。私ももうこんな年ですけど、大きな財産になりました」

康太さんの代になって、つき合いは深まった。康太さんの仕事は少し金額的に折り合わなくても引き受ける。「恩があるからね。もちろん康太君も気持ちの優しい人だし、いい問屋に育ててほしいから」

老舗の若き6代目を、高岡銅器の職人たちの心意気が支え、見守っている。



康雄さんは生前、「子どもたちの人生を縛るつもりはない」と言っていた。

工場仕事の手伝いの延長のように、康太さんは自然と跡を継いだ。気負いはない。

高岡銅器を取り巻く環境は厳しいが、若い職人たちの新たな息吹も感じる。

「自分に何ができるのか」と問う視線の先に、父の姿がある。

鋳物師の血が康太さんにも流れている。

150年を超える銅器問屋、大寺幸八郎商店の歴史の中で、小売りという業態は初めてとなる。店には古い銅器から若手作家や職人の意欲作まで、さまざまな鋳物が並び、高岡銅器の裾野の広さを知ることができる。昨年、国の重要伝統的建造物群保存地区になった高岡鋳物発祥の地・金屋町で、高岡銅器の歴史、その魅力を伝えている。



「6月の海」 野上 祇麿

しかし、病が静かに体をむしばみ始めていた。



鋳物は、溶解した金属を鋳型に流し込んで成形する。溶解する時に発生する酸化物は金属を劣化させる原因になる。

康雄さんの発明は、その酸化物を分離する技術だった。「きっと、いい鋳物ができる。高岡の鋳物屋さんが喜ぶぞ」。康雄さんはうれしそうに話していた。

そのころから「口内炎が治らない」と不調を訴える。がんだと分かったときには、口が開かなくなっていた。放射線や抗がん剤治療の後、05年に手術。片方の頬を大き

借りた。車に康雄さんが待機し、康太さんが指示を受け実験する。結果を車の康太さんに伝え、二人で話し合い、実験を繰り返す。そんなふうになんかデータを集めた。

08年7月、2度目の出願。その4カ月後、康雄さんは亡くなった。

「父さんの思いを形にしたい」

老舗といってもいまは母と二人きりの店。特許取得にはそれなりに費用もかかる。康太さんは特許庁からの反論に粘り強く応じ、昨年、願いをかなえた。最初の出願から12年がたった。

『特許証』の「発明者」に康雄さん、「特許権者」には康太さんから3人の子の名前がある。



虹シリーズ第2巻発刊  
(6月20日発売予定)  
第2巻は、北日本新聞連載の21~40回目までの20話分を収めています。1冊1050円(税込)です。6月20日からウェブブックで2話分を読むことができます。北日本新聞ウェブサイトのホームページの「くらし情報」から「虹1・2」のパナーをクリックしてください。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50  
北日本新聞社高岡支社「虹」係  
FAX 0766-25-7773  
次回掲載は7月1日(月)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに  
OTANI 大谷製鉄株式会社  
企画・制作/北日本新聞社営業局